



やかただより

広川町
全戸配布

第113号
令和2年3月

「濱口梧陵学」が創設 !!

今年が「濱口梧陵生誕200年」ということはこれまでも本紙上でもお伝えしてきました。広川町としても「濱口梧陵生誕200年未来会議」を立ち上げ、記念事業等の計画が進められています。昨年9月17日に「未来会議」の設立会に合わせて、委員の曾野洋四天王寺大学教授が講演されました。この中で「濱口梧陵学」の創設が提案されました。この提案にそって、今月号から、曾野先生の文章が寄稿されることになりました。

「やかただより」をバージョンアップして、2、3ページに曾野先生の提案を掲載させていただきます。曾野先生は、平成27年に第2回稲むらの火講座で「濱口梧陵と福沢諭吉のコラボレーション」という演題で講演いただきました。また、毎日新聞和歌山版では毎月「範は紀州史にあり～わかやま教育今昔」という連載もされています。今号から連載されますので、楽しみに拝読してください。

また、「やかただより」はしばらくA3版2ツ折で、「広報ひろがわ」に折り込まれます。

「語り部ジュニア」発表会

前号でお知らせした「梧陵語り部ジュニア」の学習発表会は1月25日(土)稲むらの火の館3階ガイダンスルームで開催されました。広、南広小学校の5、6年生が今年度6月以降に学習した「稲むらの火」と「濱口梧陵」のこと、東日本大震災ののこ等を発表しました。練習時よりも大きな声ではっきり発表して気持ち良く聞けました。終了後、「語り部ジュニア認定証」が授与されました。多くのマスコミの取材もありました。



「稲むらの火」は有名？

平成7年(1995)1月17日に発生した阪神・淡路大震災、震源は淡路島であったが、都市を襲った直下型地震の被害はたいへんなものでした。特に阪神高速道路の高架橋が倒れた風景は衝撃的でした。あれから四半世紀が経過したのですね。25年が経過した今年、神戸周辺では大災害を語り継ぐためのフォーラムやシンポジウムが開催されました。館長も、1月24日に「2020世界災害語り継ぎフォーラム」へ参加しました。開会前に、基調講演をされる俳優の堀内正美氏を紹介していただきました。「災害を語り継ぐのは、『稲むらの火』ですよ、今日もそのことに触れるつもりです。」と言われましたので、期待して聞いていました。この人の講演は、震災時の救援活動の仲間を呼び出して、当時の思い出話を



するというスタイルでした。最後の方で、「稲むらの火の館の館長さんが見えているはずですよ。前へ出てきてください。1分間話してください。」とマイクを渡され、館の紹介をさせていただきました。びっくりするやら有難いやら、「稲むらの火」ってそんなに有名なのかなと思いました。

読売新聞の夕刊全国版「幸せランチ」というコーナーに、町内飲食店のランチと共に取り上げていただきました。掲載された直後に大阪方面の方から、見学と食事に行きますと連絡がありました。こんなところに取り上げていただけるのも有難いことです。「稲むらの火」ってそんなに有名なんですすね、誇らしいです。



濱口梧陵の新視点

早春の候、広川町の皆さまにおかれましては、いかがお過ごしでしょうか。私は昨秋、「濱口梧陵生誕200年未来会議」（会長・西岡利記町長）の委員に就任した、曾野 洋（その・ひろし）です。よろしく、お願い申し上げます。

委員就任にあたり、2019年9月17日に広川町役場において「今こそ再発見、濱口梧陵」という講演をおこない、梧陵翁のさまざまな魅力の一端に接近しました。そのうえで、まだまだよく分からない側面がある翁の一生を解明するために、〈濱口梧陵学のすすめ〉という提案もおこなった次第です。



著者紹介
四天王寺大学教授
慶應義塾大学客員研究員
曾野 洋氏

1964年和歌山県生まれ。慶應義塾大学法学部卒業後、神戸大学大学院修士課程、名古屋大学大学院博士課程、慶應義塾大学SFC研究所上席所員、慶應義塾福澤研究センター客員所員、四天王寺大学教育学部長、同大学IR戦略統合センター長などを経て、四天王寺大学教授、慶應義塾大学研究員を兼任。2012年より毎日新聞にて、「範は紀州史にあり」を連載中。

さて、本来ヒストリーは、ギリシャ語のヒストリアーを語源とする、ストーリーの姉妹語であります。歴史という語は、物語性を秘めているのです。したがって歴史研究も、歴史・時代小説と同様で時には推論をはたらかせ、さらに想像力をめぐらせ物語性を加味するくらいの余裕があっても良い。そう、私は実感しています。

こうした気分を持ちながら、ある学校の歴史と本年生誕200年を迎えた濱口梧陵(1820～85年)の新視点について、以下で紹介します。

今からちょうど141年前の、実に面白い学校風景です。1879(明治12)年3月に開校した当時の、県立和歌山中学校(以下和申、現在の県立桐蔭高等学校)の実態はこんな感じでした。

開校当初の和申の年度予算を見ると、教員によって給料に格差があったのです。洋学(英語による西洋知識の摂取)を担当する教員が非常に厚遇

されており、草創期の和申が重視した教育内容がうかがえます。また、初期の和申の特徴は、教職員の多くが師範学校(現在の和歌山大学教育学部)と兼務していた点にもあります。現代におきかえると、桐蔭高校と和歌山大学を兼務する教員が多数いたということになります。

さらに、興味深いのは、和申の学籍簿に記載された第1期入学生126人の動向です。なんと3年後に卒業を迎えたのは全部で10人しかいません。ちなみに第2回卒業生は5人、第3回が4人といった具合です。当時の生徒の回想によると、初期の和申では「師範学校へ転学」したり、「東京留学」と称して県外へ出て行く者が多くいて、まるで「中途退学ばやり」の様相を呈していたようです。

実のところ、初期の和申で中退が流行した最大の要因は、ライバル校の存在でした。そう、私は推察しています。和申開校時、すでに和歌山城下町に100人以上の生徒を常に集めていた私立中学校(文部省公認)が先行していたのです。洋学と東京への内地留学を重視した自修学校であります。



紀州徳川家と福沢諭吉が連携して安定的に経営された自修学校の存在は、和申の中退を生徒

たちに促した。これが、私の仮説です。なお、両者の連携や、自修学校の消長などについては、曾野洋「旧和歌山藩士族の近代中等教育構想に関する考察（その1）～（その3）」（『和歌山県教育史研究』創刊号～第3号）に詳しいので参照下さい。

ここからが、一層大事です。

紀州徳川家と福沢諭吉を密接に結び付ける役割を担った男たちがいたのです。そのひとりが、濱口梧陵でした。「稲むらの火」の逸話で有名な梧陵は、「ヤマサ醤油」の経営者であるとともに、紀州（和歌山）藩勘定奉行や初代和歌山県議会議長などを歴任した政治家としての顔を持ちます。だが、経営者や政治家という視点だけでは梧陵を語り尽せない、と思うのです。

濱口梧陵を本当に理解するためには、新視点が必要であります。幕末維新时期における非常に複雑な人間関係や利害関係を円滑に水面下で調整する役割を果たした、フィクサーとしての視点で梧陵を再吟味する。

この再吟味ができたとき、現代人にとって示唆に富む新しい濱口梧陵イメージが誕生するのではないか、と考えます。これが、今回特に述べたかった私見であります。



チャンスをつくりぜひ「稲むらの火講座」などにおいて、この新視点について広川町内外の皆さまと意見交換し、＜新しい濱口梧陵ものがたり＞を創造する重要なきっかけにしたいものです。



四代目こども梧陵ガイドの振り返り

こんにちは！ 「こども梧陵ガイドプロジェクトチーム」の関西大学近藤ゼミ、龍谷大学石原ゼミです！ 今月号のやかただよりでは、2019年度に実施した「こども梧陵ガイド」の振り返りをします。

2019年度は、大学生が何度も広川町を訪れ、広小学校の6年生の皆さんと関わる機会が多くあり



顔合わせの交流授業、広小学校の避難訓練の視察、「こども梧陵ガイド」のクイズ作成、「稲むらの火祭り」への参加、「こども梧陵ガイド」の練習。これらの取り組みから「こども梧陵ガイド」の本番では、小学生と大学生がワンチームとなり、2日間で約300人の来館者の皆さんにガイドをすることができました。回を重ねるごとに子供たちが堂々と取り組むようになり、その姿は本当に頼もしかったです。振り返りの授業では、「楽しく勉強できた」「大学生と仲良くなれてよかった」「もっと梧陵さんについて学びたい」などの声が寄せられました。大学生も貴重な体験をさせていただき、感謝の気持ちでいっぱいです。

2020年度も「こども梧陵ガイド」の活動は代替わりをして、五代目として継続する所存です。どのような展開が待っているのか今から本当に楽しみです。「こども梧陵ガイド」プロジェクト、引き続きご支援のほど、お願いします。



『安政聞録』 翻訳文 (その12)

原作・古田 詠処 養源寺蔵

さて濱口大人は、どうかして元の広村に戻したいと、色々と援助をし、長屋を建てつらね、人が戻ってくるようご苦労なされた。そのため、困って他の村へ行こうとしていた者もその恩徳に感動し、戻ってくる者も多かった。それからまた濱通りに土堤を築くことを企画され、大勢の人を集め、その花の数ほど人が集まり、人々を驚かせた。次第に完成に至り、人々は大いに力を得、喜び合ったのはいうまでもない。

八 回

地震が起こった卯の年(1855・安政2年)の十月、天は毎日のように曇り、外へ飛び出ること、何度もありその数も覚えておらず、また小さな津波が浦に打ち上がり、人々が騒ぐことも度々あった。私は10月5日に銚子を出て伊勢や京都・大坂へまわるという長旅で、11月7日に広へ到着した。その頃には少し地震も収まり、明けて辰の年(1856・安政3年)の正月もおおむね平年通りで、正月参りに来る者もいて、みな新年を喜びあった。二月上旬にはまた度々、中・大の地震に飛び出ることがあり、またこれに驚いて逃げ出す者もあり、その後も忘れた頃に地震がくるという前例のない事になった。同年11月22日、夜中に大地震がおき、23日夕方6時、中・大の地震があった。その夜半、にわかに入が「海がいつもと違う」ことを伝えに来て、家の者が目を覚まし、また寝て、それをたたき起こし、村中に広まり、ある者は海へ様子を見に行き、また逃げる者も多かった。村主が浜へ、7、8人見張り番を出した。もし異変があればすぐに町中へ知らせるためである。また町々を金棒を持って見回り、警備を厳重にした。そして念のために潮の様子を見て戻って来た人は、いつもと変わらないと報告した。それで人は少し安堵の思いをした。中には恐れおののく者も居たが、だんだんと安心して無事を喜んだ。さてこの後に聞いたことだが、その夜東の方から火が之よし宵時から八つころまで見えたという。山火事であり、また風も激しかったとのこと。しかしそれで、火の元に気をつけよと誰かれともなく言い出した。これに又宵時に沖か

ら戻った獵師の言うには、沖はいつもより波が荒かったということを誰かが聞きつけたが、とくにこの日たびたび地震もあったので思い過ごし、前述のように休んだのだが、理屈いえば特に言い慎まねばならない。論語にも「たくさん聞いて、疑わしい事はやめ、それ以外の自信の持てることを慎重に口にしていけば、あやまちは少なくなる」とあるように、放言できない

九 回

特に困ったのは、津波以来、家々の井戸水が濁り、あるいは干上がり、みな遠方へ清水をくみにいかねばならず、あるいは浜川西の方の人らは乙田・黒石あたりまで、その他清水ある所を聞けば遠きを厭わず、我先に争って往来するありさまであった。そのうちきれいになる井戸もあったが、この巳の年の春に至っても戻らない井戸も多かった。我が家の井戸はまだ濁ったままで、かつ金属も多く、ときどききれいになりかかる時もあったが、暫くしたらまた濁り、いつになればきれいになるのか。勿論水替えも度々下が、その時だけで、又渴全水蠟、ととのほざるべし。

十 回

話を戻すが、卯の年の10月5日は、津波が周期的に来る年であり、八幡宮に参拝して祈祷をし、また餅まきもし、人々も集まった。またこの日土堤へ各家一人ずつ供出し、土を運んで、辻を浜にて湯上の土を持ちあい、人々はここで、家々で津波に応じ米を炊き出し、おむすびにして渡した。もちろん役人衆も出張り、賑やかなことであった。翌年の辰の年、10月5日はこの例にならい、昨年来二年とも実に穏やかな天気で、人々は喜び合い、にぎわった。来る年もまた来る年も、きっとこの日は、人が賑わうであろう。盆踊りなども華々しく催した。これはまったく御世の余光で、かつ濱口大人の高徳の余光であり、天もこれをお助け下さったのだろう。讃えるべきかな、めでたい事かな。私の記述の及ばぬ事も多いであろう。それは読む人が推察してほしい。私が書き綴った根拠に足りないものであることを忘れてはいけない。(以下略) (おわり)

長らくのご愛読ありがとうございました。